

Chanoyu

The Arts of Tea Ceremony,
The Essence of Japan



特別展
茶
の
湯



2017.
4.11(火)～6.4(日)

東京国立博物館 平成館
(上野公園)

名碗

あしかが よしまさ
足利義政、織田信長、千利休、松平不昧など、
歴史を動かした天下の武将や茶人たちが手にした
国宝級の名碗が一堂にそろいます。



オールスターズ

絢爛豪華な 唐物天目

国宝

油滴天目

中国・建窯
南宋時代・12〜13世紀
大阪市立東洋陶磁美術館蔵

釉に浮かびあがる
金色や銀色の美しい斑模様
が
油の滴に見えることから
「油滴」と呼ばれています。
今日知られる油滴天目のなかでも
白眉と名高い作品。
豊臣秀吉の甥（のちに養子）、
秀次所持と伝わります。



足利義政が愛した 青磁茶碗

重要文化財

青磁輪花茶碗 銘馬蝗絆

中国・龍泉窯
南宋時代・12〜13世紀
東京国立博物館蔵

足利義政の手にあつたとき
ヒビが入ってしまったため、
中国へ替わるものを求めたところ、
もはやこれほど美しい青磁を
作ることができないとして、
鎚を打って送り返されたと伝わります。
鎚を大きな蝗に見立て、
この名が付きました。



侘茶の萌芽

重要文化財

灰被天目 銘虹

中国
元〜明時代・14〜15世紀
文化庁蔵

足利義政所持と伝わる唐物天目。
灰を被ったような
落ち着いた釉色は、
華麗な曜変や油滴を格上とする
東山御物のなかでは
評価が低かったものの、
侘茶の新たな価値観において
高く評価されるようになりました。



天下一の高麗茶碗

国宝

大井戸茶碗 喜左衛門井戸

朝鮮

朝鮮時代・16世紀

京都・孤篷庵蔵

4月28日〜6月4日

朝鮮半島の高麗茶碗のなかでも、井戸と呼ばれる一群は数が多く、代表的な存在です。なかでも本作品は力強く荒々しい姿で見る者を惹きつける大井戸茶碗の雄。「喜左衛門」はかつて所持した人物の名で、のち松平不昧が所持しました。



重要文化財

青井戸茶碗 柴田井戸

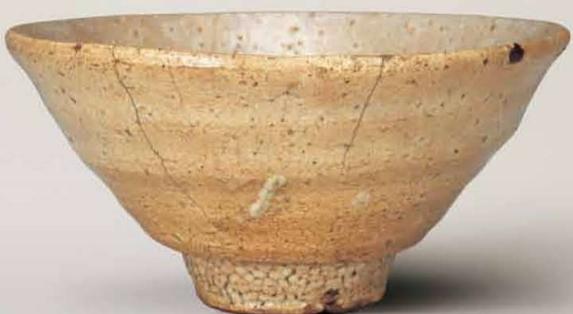
朝鮮

朝鮮時代・16世紀

東京・根津美術館蔵

時代を超えて愛された茶碗

井戸茶碗のなかで直線的な形と冴えた釉調が特徴的な青井戸茶碗。「柴田」はそのなかでも、名品と称されるもので、織田信長から柴田勝家へ贈られてこの名が付きました。近代には平瀬家から藤田家へ伝わったことでも知られています。



重要文化財

赤楽茶碗 銘無一物

長次郎

安土桃山時代・16世紀

兵庫・顕川美術館蔵

4月11日〜5月7日

利休の創意に満ちた楽茶碗

長次郎は楽焼の始祖と伝わる陶工。千利休のもとで茶碗の制作に励みました。飾り気のない端正な姿は、利休の好みによって作られたものであり、赤楽茶碗の代表格に位置づけられています。「本来無一物」の禅語から、この名が付けました。



黒楽茶碗の雄

重要文化財

黒楽茶碗 銘 ムキ栗

長次郎

安土桃山時代・16世紀
文化庁蔵

上部を四方に、裾は丸い形にした異色の黒楽茶碗。
長次郎作と伝わる作品のなかでも、特に強いつくりを見せていますが、手の中にすっと収まる不思議な魅力をそなえています。のちに近代数寄者、平瀬露香が所持しました。



国焼の最高峰

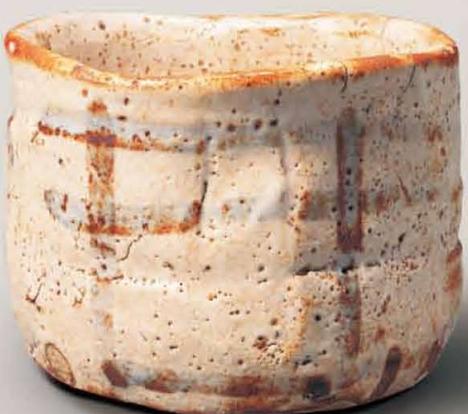
国宝

志野茶碗 銘 卯花壻

美濃

安土桃山〜江戸時代・16〜17世紀
東京・三井記念美術館蔵

志野は美濃焼（現在の岐阜県東濃一帯の代表的なやきもの）。白い釉のなかに赤い火色が生み出す表情が魅力です。その釉肌と鉄絵で表わされた文様を、卯の花が咲く垣根に見立てています。国焼の茶碗のなかでも傑作と名高い作品です。



光悦による 黒楽茶碗の傑作

重要文化財

黒楽茶碗 銘 時雨

本阿弥光悦作

江戸時代・17世紀
名古屋博物館蔵

江戸時代初期を代表する目利きであり、芸術家としても名高い本阿弥光悦作の黒楽茶碗。楽家との交流が深く、すぐれた茶碗の制作でも名を残しました。変化に富んだ豊かな釉の表情から「時雨」の名が付いたといわれています。



足利 将軍家の 茶湯

—唐物荘厳と唐物数寄

12世紀頃、中国の宋からもたらされた点茶(抹茶)という新しい喫茶法が、次第に日本の禅宗寺院や武家のあいだで広まりをみせます。彼らは中国の美術品である「唐物」をこぞって集めて室内を飾り、それらを用いて茶を喫することで自らのステイタスを示しました。そして室町時代、15世紀頃には、足利将軍家には最高級の唐物が集められ、鋭い鑑識眼による分類、評価がなされるようになります。この唐物を受でる「唐物数寄」の価値観は、のちの「茶の湯」に大きな影響を及ぼすことになるのです。

ここでは、足利将軍家に集められた第一級の名品を中心に、唐物数寄の眼で選り抜かれた貴重な作品を紹介します。

重要文化財

遠浦帰帆図

牧谿筆

中国 南宋時代・13世紀
京都国立博物館蔵
5月9日〜5月21日

本図を含む瀟湘八景図は、中国の洞庭湖に注ぎ込む瀟水と湘水一帯の景勝を描いたもの。足利義満の鑑蔵印「道有」があり、のちに織田信長が所持しました。



重要文化財

廬山図

玉潤筆

中国 南宋時代・13世紀
岡山県立美術館蔵
4月11日〜5月7日

牧谿にならぶ中国の著名な画家の一人として日本で高く評価されてきた禅僧画家、玉潤の名品。かつて佐久間将監が茶掛けに合うように裁断したというエピソードでも知られます。



国宝

青磁下蕪花入

中国

南宋時代・13世紀
アルカンシエール美術財団蔵

中国の青磁は鎌倉時代以降、日本へ大量に運ばれ、茶碗や花生、香炉など茶湯道具として珍重されました。本作もそのひとつで、玉にも優る釉調で圧倒的な美しさを誇る花生の傑作です。

国宝

紅白芙蓉図

李迪筆

中国

南宋時代・
慶元3年(1197)
東京国立博物館蔵
5月23日〜6月4日

南宋の画院画家、李迪による花の絵。1日で白から紅に色を変える醉芙蓉を瑞々しく繊細に描いています。茶室空間に応じて次第にこのような小幅の掛物が好まれるようになります。



侏茶の誕生

—心になうもの

15世紀末になると、新たな時代の担い手となる町衆が急速に力をつけ、連歌や能、茶、花、香などを楽しみ、究めるようになります。そうしたなか、珠光（1423～1502）や「下京茶の湯者」と呼ばれる人々のあいだでは、唐物を珍重するだけではなく、日常の道具のなかからも好みに合ったものを取りあわせる新しい風潮が生まれました。この「侏茶」の精神は、武野紹鷗（1502～1555）ら次の世代へ広がり、深められていきます。

第二章では、彼らの眼を通じて「唐物」から「高麗物」、「和物」へと茶湯道具に対する価値観が変化する様子をたどりながら、時代の転換期に萌芽した侏茶の美術を展観します。



重要文化財
唐物茶壺 銘 松花

中国
南宋～元時代・13～14世紀
愛知・徳川美術館蔵
4月11日～5月7日

葉茶を保存するための大壺。茶壺は戦国武将たちが特に珍重し、その価値は一國一城に値するほどまでいわれました。本作品は織田信長、豊臣秀吉、徳川家康と歴代の天下人が所持した名物です。

重要文化財
唐物肩衝茶入 銘 初花

中国
南宋～元時代・13～14世紀
徳川記念財団蔵
4月11日～4月23日

中国南方で作られた日用品の褐釉小壺が日本で唐物茶入として珍重されました。肩の衝いた大ぶりのものなかも、本作品は天下の名肩衝として知られ、命銘は足利義政と伝わります。



黄天目 珠光天目

中国
元～明時代・14～15世紀
東京・永青文庫蔵

珠光所持と伝わるどころから「珠光天目」と呼ばれる茶碗です。釉を二度にわたって掛けており、その下釉の色が黄色を帯びているので黄天目と分類されています。灰被ています。灰被天目に同じく、黄天目もまた侏茶の流行にともなって次第に評価されるようになりました。



※第四章の展示に変更になりました。

重要文化財
粉引茶碗 三好粉引

朝鮮
朝鮮時代・16世紀
東京三井記念美術館蔵

朝鮮半島で作られた白釉碗。粉を吹いたような器肌と、火間と呼ばれる釉が掛からない部分が景色となって風格を漂わせています。戦国武将三好氏所持と伝わることからこのように呼ばれています。

侘茶の大成

―千利休とその時代

安土桃山時代、侘茶を継承した千利休（1522～1591）によって茶の湯はついに天下人から大名、町衆へと、より広く深く浸透することになりました。天下人、豊臣秀吉の茶頭となった利休は、珠光以来の伝統を受け継いで、唐物に比肩する侘茶の道具を見出しただけでなく、新たな道具を創り出し、それらを取りあわせることで茶の湯の世界に新しい風を吹き込んだのです。

本章では「利休がとりあげたもの」、そして「利休の創造」と題して、千利休の茶の湯に迫ります。続いて、利休の精神を継いだ茶人、古田織部（1544～1615）とこの時代に花開いた茶陶を通じて、自由で力強い桃山期の茶の湯の魅力を紹介します。

重要文化財

千利休像

伝長谷川等伯筆・古溪宗陳賛
安土桃山時代・天正11年（1583）
大阪・正木美術館蔵
4月18日～6月4日



天正11年（1583）、桃山期を代表する絵師、長谷川等伯が利休62歳の姿を描いたと伝わるもの。眼光鋭く、威風凛々な姿です。利休参禅の師、大徳寺117世古溪宗陳の賛が認められます。

国宝

法語 瑠禅人宛

密庵咸傑筆
南宋時代・淳熙6年（1179）
京都・龍光院蔵＊
5月30日～6月4日

密庵咸傑（1118～1186）は南宋を代表する臨済宗の高僧。利休の書状が添えられています。大徳寺塔頭龍光院の国宝の茶室、密庵には、この作品を掛けるためだけに設けられた「密庵床」があります。

唐物尻膨茶入 利休尻膨

中国
南宋～元時代・13～14世紀
東京・永青文庫蔵

その名の通り、小ぶりながらふっくらと安定感のある姿。利休が天正15年（1587）の北野大茶会に用いたとされ、のちに細川三斎（忠興、1563～1646）の手に渡りました。

重要文化財

黒楽茶碗 銘 俊寛

長次郎
安土桃山時代・16世紀
東京・三井記念美術館蔵

楽焼の創始者といわれる陶工、長次郎が利休の指導で生み出した黒楽茶碗の代表作の一つ。腰が低く、強く張り出した筒形に緊張感がみなぎる名碗です。



茶人の系譜

1400

珠光 (1423-1502)

侘茶の始祖といわれる人物。詳しい経歴はわかっていないが、大徳寺の一休宗純に参禅し、茶人として名をあげて足利義政に仕えたとも伝えられる。弟子に与えた「心の文」は次代の茶人たちに大きな影響を与えた。



1500

足利義政 (1436-1490)

室町幕府第8代将軍。将軍家の唐絵や唐物、茶湯道具が同朋衆と呼ばれる側近らによって管理、鑑定され、座敷飾りが確立したのはこの義政の時代。室町時代の茶湯を語るうえで欠かすことのできない人物。



武野紹鷗 (1502-1555)

堺の豪商。禅の理解が深く、また連歌を三条西実隆に学ぶ。そして珠光の精神を継いで侘茶を広め、千利休が師事したことで知られる。



千利休 (1522-1591)

茶の湯の大成者。唐物を中心とした書院台子の茶と、侘茶を融合した新しい茶の湯を創り上げた。織田信長、豊臣秀吉と天下人の茶頭をつとめ、天下一の茶匠と称された。



古田織部 (1544-1615)

豊臣秀吉に仕えた戦国武将であり、千利休に師事した茶人として知られる。利休の最も近くにあり、その創造性に富んだ茶風を受け継いで、安土桃山〜江戸初期の茶の湯を先導した一人である。



小堀遠州 (1579-1647)

徳川将軍に茶を指導した大名茶人。古田織部に茶を学ぶ。織部亡き後、「きれいさび」と呼ばれる気品高い、洗練された茶風によって、将軍家をはじめ江戸における武家の茶の湯を導いた。



1700

松平不昧 (1751-1818)

江戸後期、松江藩主をつとめた大名茶人。小堀遠州に倣い、古典をたどり、名物道具を収集して『古今名物類聚』を著す。その精神は近代数寄者と呼ばれる人々にも大きな影響を与えた。



1800

平瀬露香 (1839-1908)

大阪の金融界の重鎮で、和歌や有職故実、能楽、華道などにも傾倒した文化人として知られる。



藤田香雪 (1841-1912)

建築、金融、紡績などを手がけた関西の財閥、藤田組の創始者。第一級の古美術収集でも知られ、コレクションは現在の大阪・藤田美術館の礎となっている。



益田鈍翁 (1848-1938)

旧三井物産の初代社長として知られる実業家。仏教美術をはじめ、日本の古美術に造詣が深く、一大コレクションを築いた。また、その高い鑑識眼に基づいて、晩年、茶の湯に傾倒したことで有名。



原三溪 (1868-1939)

横浜を拠点に生糸貿易で財をなした実業家。安田靉彦ら若手芸術家の育成や横浜・三溪園の造園でも知られる。



1900

四

古典復興

—小堀遠州と松平不昧の茶—

江戸時代、太平の世において茶の湯は変化の時代を迎えます。小堀遠州(1579～1647)を中心として室町時代以来の武家の茶を復興する動きや、千利休の精神を継承して家元を確立する動き、さらに公家の雅な世界をとり入れて新しい風潮を創るうとする動きなどが生じ、それらが相互に影響を及ぼしあっていました。

本章ではまず、武家の茶を再興し「きれいさび」と称される新たな茶風を確立した小堀遠州にまつわる道具を中心に、江戸時代前半の茶の湯をご紹介します。

続いて、江戸時代後期の松平不昧(治郷、1751～1818)の茶の湯をとりあげます。すでに茶の湯が形骸化していたといわれるこの時代、松江藩主をつとめた不昧は古典をたどり、道具を収集、評価しました。この不昧の眼を通じて、よみがえった名品をご紹介します。

小堀遠州

古銅象耳花入

銘 キネナリ

中国
明時代・14～15世紀
東京・泉屋博古館分館蔵

遠州所持と伝わる古銅花生。下蕪形の姿が杵に似るとしてこの名が付いたと考えられます。気品に満ちたその佇まいは、品格を重んじる武家茶の道具にふさわしいでしょう。



小堀遠州

丹波耳付茶入 銘 生野

丹波
江戸時代・17世紀
大阪・湯木美術館蔵

国焼茶入の代表作。丹波(兵庫県篠山市)は遠州の指導により優れた茶陶を生み出しました。本作は、遠州自らが丹波の名勝に因み名付けたといわれ、いかにも遠州好みの洗練された姿です。



野々村仁清

重要文化財

色絵若松図茶壺

仁清
江戸時代・17世紀
文化庁蔵

江戸初期の京焼の名工、野々村仁清の作品。茶人金森宗和のもとで天皇や公家好みの瀟洒な茶陶の制作にたずさわったといわれています。仁清黒と呼ばれる黒い釉と肩の衝いた形が目を引きます。



松平不昧

重要文化財

油滴天目

中国・建窯
南宋時代・12～13世紀
九州国立博物館蔵

松平不昧は名器を、宝物、大名物、中興名物と細かく分類、評価しました。本作品は古田織部所持と伝わり、不昧の道具を記録した『雲州蔵帳』に「大名物」と記載されています。



五

新たな創造

近代数寄者の眼

幕末から明治維新の混乱期には、寺院や旧家から宝物や名品が世の中に放出されました。そうした時期に、平瀬露香(亀之助/亀之輔、1839～1908)、藤田香雪(伝三郎、1841～1912)、益田鈍翁(孝、1848～1938)、原三溪(富太郎、1868～1939)ら名だたる実業家たちはすぐれた眼で第一級の茶道具をとりあげ、伝統を重んじつつ、新しい価値観で新しい時代の茶の湯を創りあげていきました。本展覧会の最後に、関西と東京でそれぞれ名を馳せたこの四人の数寄者(趣味人)をとりあげ、それぞれの茶の湯とその美学を各二週ごとに展観します。

藤田香雪

4月11日～4月23日

重要美術品

大井戸茶碗

有楽井戸

朝鮮

朝鮮時代・16世紀

東京国立博物館蔵

織田信長の弟で茶人の織田有楽所持と伝わる大井戸茶碗。悠然と穏やかな佇まいで見守る者をひきつける名碗です。有楽のもの、紀伊国屋文左衛門らの手を経て藤田家に伝わります。



※大井戸茶碗 有楽井戸は第二章の展示に変更になりました。
展示期間:4月11日～4月27日

平瀬露香

4月25日～5月7日

伊羅保片身替茶碗

千種伊羅保

朝鮮

朝鮮時代・16～17世紀

個人蔵*

伊羅保と呼ばれる高麗茶碗はおもに日本からの注文で焼かれたとされ、種類が多く、人気が高い茶碗です。本作品は平瀬家の屋号「千種屋」に因み、「千種伊羅保」と呼ばれます。

益田鈍翁

5月9日～5月21日

黒楽茶碗 銘 鈍太郎

覚々斎原叟作

江戸時代・18世紀

個人蔵*

表千家六代、覚々斎原叟(1678～1730)の手づくねによる黒楽茶碗。釉の掛からない土見せが豪快な景色となっています。鈍翁は、この茶碗の旧蔵者の名に因んで「鈍翁」と名乗るようになりました。

原三溪

5月23日～6月4日

唐津茶碗 銘 入相

唐津

江戸時代・17世紀

個人蔵*

桃山期を代表する九州茶陶、唐津焼の茶碗です。日本美術を深く愛し、新進の画家たちを育てた三溪の人物を映したように優しく穏やかに存在感を漂わしています。

展覧会趣旨

12世紀頃、中国で学んだ禅僧によってもたらされた宋時代の新しい喫茶法は、次第に禅宗寺院や武家など日本の高貴な人々の間に浸透していききました。彼らは中国の美術品である「唐物」を用いて茶を喫すること、また室内を飾ることでステイタスを示します。その後、16世紀(安土桃山時代)になると、唐物に加えて、日常に使われているもののなかから自分の好みに合った道具をとりあわせる「侘茶」が千利休により大成されて、茶の湯は天下人から大名、町衆へより広く普及していききました。このように、日本において茶を喫するという行為は長い年月をかけて発展し、固有の文化にまで高められてきたのです。

本展覧会は、おもに室町時代から近代まで、「茶の湯」の美術の変遷を大規模に展覧するものです。「茶の湯」をテーマにこれほどの名品が一堂に会する展覧会は、昭和55年(1980)に東京国立博物館で開催された「茶の美術」展以来、実に37年ぶりとなります。各時代を象徴する名品を通じて、それらに寄り添った人々の心の軌跡、そして次代に伝えるべき日本の美の粋をご覧ください。

展覧会のみどころ

① 37年ぶり、奇跡の大「茶の湯」展

昭和55年(1980)、東京国立博物館において開催された「茶の美術」展は、名家秘蔵の茶道具を日本の美術としてとりあげた初めての展覧会でした。それから37年の時を経て、新たに21世紀の眼で日本文化の象徴「茶の湯」をたどります。

② 有名武将・茶人も愛した名碗オールスターズ

かつて名だたる武将や茶人に愛され、時代を超えて人々の心をとらえてきた名碗が一堂にそろういます。中国、朝鮮、日本と異なる地で焼かれた第一級の名碗たち。各時代を象徴するこれだけの名品がそろうことはめつたになく、まさに奇跡の開催といえます。

③ 近代から現代へ。茶の湯をつないだ近代茶人たち

明治時代、日本の経済界を支えた大実業家たちのなかに、古美術を愛し、新しい視点で茶の湯を究めた人々がいました。今回の展覧会で注目する藤田香雪、益田鈍翁、平瀬露香、原三溪、この四人の眼を通して、創造力にあふれた茶の湯の新たな魅力をご紹介します。

会期

2017年4月11日(火)～6月4日(日)

会場

TNM 東京国立博物館 平成館 (上野公園)

〒110-8712 東京都台東区上野公園13-9 東京国立博物館ウェブサイト <http://www.tnm.jp/>

休館日

月曜日 ※ただし5月1日(月)は開館。

開館時間

午前9時30分～午後5時

※金曜・土曜は午後9時まで。日曜は午後6時まで。ゴールデンウィーク期間中の4月30日(日)、5月3日(水・祝)～7日(日)は午後9時まで。

主催

東京国立博物館、NHK、NHKプロモーション、毎日新聞社

協賛

伊藤園、トヨタ自動車、日本写真印刷、三井住友海上火災保険、三井物産

観覧料金

(税込)

一般 1,600円(1,400円/1,300円)

大学生 1,200円(1,000円/900円)

高校生 900円(700円/600円)

※中学生以下無料 ※障がい者とその介護者1名は無料(入館の際に障がい者手帳などを提示ください)

※()内は前売/20名以上の団体料金 ※前売券は、2016年12月5日(月)～2017年4月10日(月)まで販売

※早割りペアチケット(一般2,000円)は、2016年11月7日(月)～12月4日(日)まで販売

※チケット取扱い:東京国立博物館 正門チケット売場(窓口、開館日、前売・当日券のみ)、展覧会公式サイト、主要プレイガイドほか

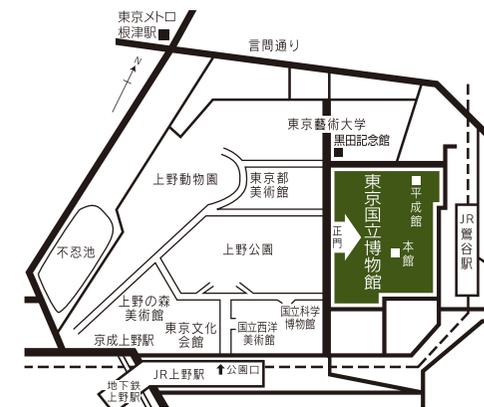
お問合わせ

ハローダイヤル03-5777-8600

[交通案内]

JR上野駅公園口、鶯谷駅南口より徒歩10分

東京メトロ銀座線・日比谷線(上野駅)、東京メトロ千代田線(根津駅)、京成電鉄京成上野駅より徒歩15分



展覧会公式サイト

<http://chanoyu2017.jp/>

報道関係お問合せ

特別展「茶の湯」広報事務局

〒107-0052

東京都港区赤坂9-1-7

赤坂レジデンシャル770

(ミュージズ・ビーアール内)

TEL 03-6804-5045

FAX 03-5785-2627

E-mail info@musepr.co.jp

*のついた作品はウェブサイトへの掲載はできません。